

連載⑨②

内海善雄の
(ITU元事務総局長)

やぶ睨み
「ネット社会」論

現代を生き抜くスイスの知恵①

その理由を探るだけでも意味がある。

そもそもスイスの成り立ちは、十四世紀、ハプスブルグ家の圧政に抵抗した辺境の三地域が同盟して独立を宣言したことから始まる。自治を勝ち取ったと言えは立派だが、当時の秩序に反して領主に年貢を払わなかった徒党

の輩の同盟集団である。当然、領主と激しい武力衝突が起きたが、徒党の輩（同盟軍）が勝利したのである。その同盟に、同じように年貢を払いたくない周辺の地域や都市が合体して、今日のスイス連邦が成立した。支配していた領主は異なり、ドイツ語を話す地域もあれば、フランス語やイタリア語を話す地域もあり、言語、民族、文化などの同一性が全く欠如した、単に打算で野合した人たちの同盟集団である。

当然、領主（周辺国家）と度重なる熾烈な戦争が起き、時には領主側につく地域なども出て内戦が起きたこともあった。スイスの歴史は、まさに戦争の歴史である。

山間僻地であるから産業もなく、外国の傭兵として出稼ぎに行っていたため、スイス傭兵同士や自国スイスとも戦わなければならぬことが多かったらしい。スイスが独立を維

持できたのは、周辺国が軍事力をこのスイス傭兵に依存していて、首根っこを押さえられていたからだとも言われている。傭兵が、出身国と戦うのは辛かっただろう。

宗教改革、三十年戦争と欧州激動の過程でスイス同盟に参加する地域が増え、ナポレオン戦争終結後のウィーン会議（一八八四年）において、どこにも与（よ）まないという永世中立の約束と引き換えにスイス領土の不可侵を初めて列強から認められたのであった。

しかし列強の約束などはいつでも反故にされ得る。スイス同盟は、近代装備と定期的な訓練を行う国民皆兵による強力な軍隊を擁して列強の侵攻に備え、また、近年は核戦争に生き抜くために各戸には地下シェルターを、大都市には非常事態時の地下大病院と地下指令所を用意している。

勤勉で無駄を嫌う生活態度

このような過程を経て人為的に成立させた国家だから、軍事、外交、貨幣、郵便以外はすべて、言語や文化・伝統が異なるそれぞれの地域（カントン）が独自に生き延びる術を編み出し、必死に生きてきたのである。

「日本は、東洋のスイスタレ」と、子供の時に教えられた。それは、永世中立で戦争をしない国になることだったと思う。しかし、スイスが強力な軍隊を持ち、戦争を厭わない国であることを知ると、「スイスを手本にせよ」の意味が分からなくなる。まさか憲法九条を廃止し、再軍備をせよということではなかったらう。

領主に反抗した徒党の輩

とは言うものの、スイスに長く住んでみるとアルプスの少女ハイジのいる平和で美しい国とは異なるしたたかな側面が分かり、見習うべきことが多い。

何よりも一人当たりのGDPが世界で一、二位を争うほど豊かである。資源もない小さい山国が何故にそんなに豊かになれるのか、

